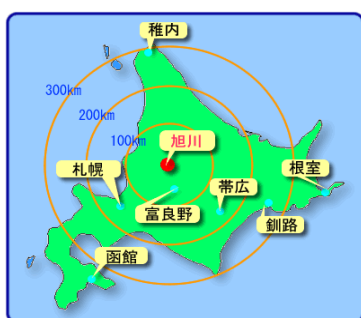


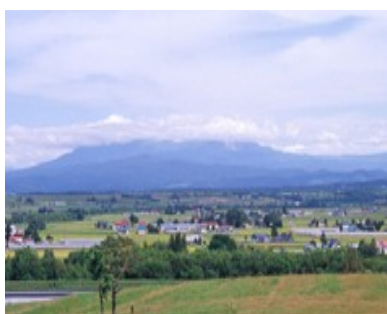
モデル事業名	西神楽地域における「冬期集住・二地域居住 環境推進モデル事業」
活動団体名	特定非営利活動法人グラウンドワーク西神楽
ホームページ	http://nishikagura.web.fc2.com/
所属／ 担当者名	特定非営利活動法人グラウンドワーク西神楽 理事 谷川 良一
連絡先	0166-75-5305 (080-2861-6618) tanikawa.r@nifty.com
活動地域	北海道旭川市西神楽地域

● 活動地域の概要

北海道旭川市南西部に位置する西神楽地域は、旭川空港近郊の田園地帯である。全国的にも有名な美瑛町に隣接し、近年人気の旭山動物園に15分、富良野市なども車で1時間圏内にあり、美しい景観や自然、観光地に恵まれている。旭川市の中心市街地までは車で20分程度で、中心市街地には、医療・福祉施設やデパート等商業施設など、生活に便利な施設が集中しており、田園環境と都市的利便環境との両方を享受できる地域である。



【位置図】



【西神楽聖和地区風景】



【田園風景】

● 活動地域の課題

近年、少子高齢化が急速に進み、西神楽の四つの地区（瑞穂・中央・聖和・千代ヶ岡）の人口は平成10年には約4,500名であったが平成22年には約3,800名と12年間で約700名も減少した。人口減少は65歳以下の流出によるもので、西神楽地域の高齢人口指数は75%と旭川市全体の37%に比べ著しく高い。冬期集住の試行を実施する聖和地区では、世帯数197世帯で65歳以上の高齢者が217名に上る。この中で居住先の除雪など積雪寒冷期の労働負担や、病院への通院や買い物などに必要な足の確保の困難さなどが要因で、農村からの人口流出が生じ、地域の活力低下が急速に進行している。

● 活動の内容

（全体）

人口高齢化に伴う諸課題や、農村に滞在して農作業を体験し安全な食を確保したいなど都市住民の意向に対応すべく、都市と農村の連携を見据えた冬期集住や夏期滞在のための実態調査、地域住民の意向調査、当地域の土地利用状況を考慮し、新たな居住形態を踏まえた農村整備のあり方、農村住民の冬期集住と都市住民の二地域居住を組み合わせた「新たな地域共同体」のあり方を提案する。

・平成20年度～平成21年度

1. 地域の高齢者を対象とした冬期集住意向アンケート調査の実施
2. 冬期集住の試行及び参加者への実態調査の実施
3. 都市住民を対象とした二地域居住意向ヒアリング調査の実施
4. 夏期滞在プログラムの策定と夏期滞在の試行
5. 冬期集住プログラムの策定と冬期集住の試行
6. 冬期集住・二地域居住ビジネスモデルの検討

（直近1年間の進捗）

地域ビジネス実現のため、大阪大学との共同研究に着手し、冬期集住が身体や精神面に及ぼす医学的データを検証するとともに、地域住民に広く周知し、安価で安心して元気に地域で暮らし続けられる環境整備を進めている。また、この事により地域における雇用創造を実現していくソーシャルビジネスの法人化を目指している。



【健康関連新サービスモデル事業
第1回検討委員会（H22.10.19）】

● 活動の成果

・全体

冬期集住の取組みでは、冬期集住の試行に参加した全 18 名の方々から、除雪からの解放、食事の提供、共同生活による安心感など、一人暮らしより便利で、離れて住んでいる子供の家族も安心してくれるという感想が多く寄せられ、ほぼ全員が満足という結果となり、この取組みが当地域の高齢者に大きな安心感をもたらした。また、当初想定していなかったマスコミ各社の取材により、本事業内容が短期間にも関わらず地域に周知され、浸透したことが大きかった。これにより、地域内企業からの集住施設の除雪支援や、集住施設近隣住民からの様々な支援（副食の提供や施設訪問支援）を受けるなど、互助の高まりがあったことは大きな成果であった。



【冬期集住の様子あれこれ】

・直近 1 年間の成果

二地域居住（夏期滞在の試行）の取組みでは、22 年最後の入居者として、京都府宇治市役所退職者夫婦が 1 ヶ月入居した他、農業研修で当地域のイチゴハウス農家とトマトハウス農家に来た大学生等に夏期滞在を体験して貰うことができた。冬期集住・二地域居住の取組みが瑞穂・中央・千代ヶ岡という周辺地区にも口コミやメディアにより広がり、次年度以降に冬期集住を実施してほしいとの声が上がっている。この動きの背景には、西神楽地域の多くの場所で、空き家や一人暮らし高齢者の増加など、同様の問題が内在していることや、今は健康状態や生活環境が安定している高齢者も、将来の生活に不安を抱えており、今後の生活の事を考え一度集住を体験してみたいと考える人が多いことが考えられる。



【夏期滞在中の農業研修の大学生（施設前にて）】

● 今後の課題及び展望

・課題

冬期集住の今後の利用意向については、次年度も是非入居したいという意見が多かった。但し、12 月～3 月の長期滞在になると、留守宅が雪に埋もれることや、育てている花や観葉植物、猫などの動物が心配になるという意見も多く、自宅を長期に離れても良い環境づくりが課題に挙がっている。また、集住施設の課題として、入居者全員分のベッドの提供、トイレの臭気取りの設置が挙げられている。更に、女性の入居者からは病院や買い物など車の送迎が必要であるとの意見が挙がっている。

・展望

冬期集住の取組では、通院や買い物など、特に女性の足の確保が大切であることから、平成 22 年度は移動サポートも含めた試行を検討する必要がある。また、夏期滞在者も移動手段を必要とすることから、平成 23 年度はカーシェアリングやレンタカーの割引、レンタサイクルなどモビリティ確保と組み合わせた夏期滞在の試行の検討が必要である。冬期集住の反響が高く、将来の理想的な施設の形態が示されたが、それまでの期間のつなぎとして、各地域数箇所の空き家を利用した集住施設の必要性を実感した。